

電子オルガンアドバイザー



中島 望

宇都宮市出身。宇都宮短期大学附属高等学校音楽科卒業、卒業演奏会出場。ヤマハ音楽院エレクトーン科、研究科卒業。エレクトーン演奏グレード2級取得。2013年「中島望 & 大下愛美エレクトーンライブ」出演。

2016年 ファーストアルバム「Come up smiling」発売。

2016年 Sounds from Dreams～エレクトーン演奏グレード2級取得者によるスペシャルコンサートに出演。

2016年、2017年、2018年スガナミ楽器バンドライブ key サポートにて参加。作曲編曲、アンサンブル実習を加曽利康之氏、鳥居達子氏、クラシック奏法を廣田奈緒子各氏に師事。

宇都宮短期大学音楽科・同附属高等学校音楽科講師。ヤマハシステム講師。



井上 まどか

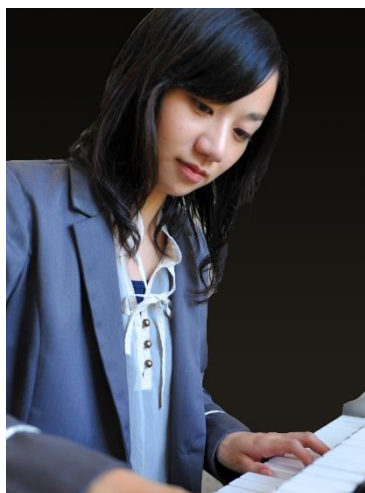
宇都宮市出身。宇都宮短期大学附属高等学校音楽科、宇都宮短期大学音楽科卒業、卒業演奏会出場。同研究科2年課程修了。

1997年ヤマハジュニアエレクトーンコンクール全日本大会にてファイナリスト賞受賞。

2000年ヤマハインターナショナルエレクトーンコンクール本選にて入賞。

その他数多くのコンサートなどに出演。現在は後進の指導にあたる他、コンクール審査員や検定試験官を務めるなど幅広く活動している。これまでに矢口理津子、大久保みどり、臼杵博之、青木弘美各氏に師事。

宇都宮短期大学音楽科・同附属高等学校音楽科講師。ヤマハ音楽教室講師。



木滑 友子

宇都宮市出身。宇都宮短期大学附属高等学校普通科特進コース、宇都宮短期大学音楽科電子オルガン専攻卒業。

2007年電子オルガン新人演奏会出演。2010年ハモンドオルガンコンクール全国大会にて優秀賞受賞。

現在は子供から大人まで幅広い年齢層にエレクトーン、ピアノ、コーラス等を指導している。これまでに宮田彰子、山口綾規、田中まゆ美、原口尚子、井上まどか各氏に師事。

宇都宮短期大学音楽科・同附属高等学校音楽科講師。ヤマハシステム講師。

「電子オルガンの演奏表現」

1. はじめに

みなさんは普段、楽しく電子オルガンに触れている事と思います。

電子オルガンは、一台で様々な音楽ジャンルが表現できる魅力的な楽器ですね。先代機種にはどのようなものがあるか、みなさんは知っていますか？宇都宮短期大学では、最新の機種から先代の機種まで設置してあります。電子オルガンについて深く知ってもらうことで、今後、みなさんの演奏にもお役に立てるのではないのでしょうか。

2. 大ホールにおける演奏のポイント

電子オルガンは、全身を使って演奏する楽器です。常日頃から大ホールで演奏する意識を持ち、幅広い表現力を身につける事が大切です。腕や足の柔軟な動きはもちろん、重心(体幹)の習得には、脱力する練習が必要です。

身体が力み過ぎると、音の伸びが弱まり遠くまで突き抜ける響きが出ません。特に大ホールでは音色の変化がはっきり分かります。

音を立ち上げる(イニシャルタッチ)だけではなく、音を出した後の持続音(アフタータッチ)においても、意識して練習してみてください。

対応する音楽ジャンルは多岐にわたります。各楽曲の特徴を理解し、適切に判断しましょう。以下の項目を参考にしてみてください。

- ・旋律に求められる楽器の特徴
- ・やわらかい音、又は鋭い音の奏法
- ・複数楽器の音量バランス

さらに、音の表情を的確に捉えることで大ホールでも美しく響きます。

電子オルガンは複数の楽器を一人で演奏することが可能です。各楽器の奏法や呼吸法を意識し、表現しましょう。そして、大ホールの残響音や演奏後の余韻まで感じてみましょう。



アンサンブル形態



レッスンの様子

3. 表現力と楽器の歴史

電子オルガンとは、電子楽器の一種です。様々な演奏形態に対応することができます。そして、会場の照明や音響機材を使用し、幅広い演出を創り出すこともできます。練習室やレッスン室では体感できない、演奏ホールでしか味わえない特別な舞台です。演奏時の表情、体のバランス、曲へのこだわり、そして自分だけの空間を創造して思いきり表現しましょう。

エレクトーンは様々な楽器を選択して、曲中の中で音の音色や響き、ボリュームなど自由に変えて演奏することが可能です。

例えば、レガート奏で弾きたいのか、細かいパッセージを弾くのか、どのようなシーン、感情で弾きたいのか、ボリュームの値はどのくらいなのか、それによって、例えば弦楽器の中だけでいうと 50 種類以上ある中から楽器選びをしなくてははいけません。まずは、楽器の研究やイメージする理想の音、出したい音を見つけることから始めましょう。

さて、電子オルガンという楽器の開発の原点は、パイプオルガンに由来します。電子オルガンが誕生したのは、1959年。初代機は1959年12月、型番は D-1。1960年代に A-2、B-1、E-1、D-2B、1970年代には D-3R、EX-42、GX-1、D-60、D-90、EX-1 など次々と新たなモデルが発表されました。

開発が進むと、より音の質を求めるようになり、『演奏機種としてのエレクトーン』、『音質を求めるシンセサイザー』、このような2つの観点に大きく分かれていきました。

1980年代、FS-30、FX-20、FX-1、HS-8、HX-1、1990年代には EL-90、ELX-1、EL-900 があり、楽器としての完成度も増しています。



左から EL-90、EL-900m



ELX-1m(重厚感があります)

2000年代、今日みなさんが演奏に使用している STAGEA です。



ELS-02c(現在、様々な演奏形態で活躍しています)

4. まとめ

数多くの先代機種を経て、電子オルガンは時代とともに今尚、進化し続けている楽器です。大きなホールで電子オルガンの迫力あるサウンドを楽しみながら、思いきり演奏してみてください。各ポイントを参考に、演奏を楽しみましょう。